

イーブルなごや・フェスティバル2020 特別講演会 <概要>
ワーク・ライフ・ソーシャル=ハイリッド人生
人生100年、成熟社会での生き方

講師：川島 高之 氏 (NPO 法人 ファザーリング・ジャパン 理事)

日時：2020年11月20日(金) 14:00~15:30 会場：イーブルなごや 3F ホール



最近、コロナ関連で「コロナ離婚」という言葉を耳にしますが、夫婦共働きで、コロナ禍で共に在宅勤務になったのに、家のことは変わらず妻が全部やって、妻が理不尽を感じる状況が生まれたことが原因のようです。

私も若い時は仕事中心の人生でしたが、23年前に子どもが誕生した時、生き方が変わりました。「子育ては期間限定の特権」と考えて、子育てをするようになり、子どもと一緒に行動する中で地域にネットワークが広がって、いかに多くの人が地域を支えているかを知ると同時に、地域や社会の問題も身近に知ることができました。そこから、社会に貢献するべく、「イクメン」を世に広げるファザーリング・ジャパンという NPO を立ち上げました。父親がイクメンになれば、母親も一人で抱え込むことなく、笑顔になりますし、子どもも父親と接することができてプラスになると考えたからです。

その経験から、私が伝えたいのは、人生は1回だから Work(仕事)・Life(私ごと)・Social(社会ごと)を3倍楽しもうということです。男性が人生の最期に発する言葉は「もっと家族との時間を大切にすればよかった」という一言が多いそうですが、そうならないように、1回しかない人生で全部やろうと提唱したいわけです。

日本もイクメンが増えたと言われますが、多くの女性たちは「うちの夫はエセ・イクメンだ」と言っています。家事・育児の時間は1日1時間で、妻の1/5とか1/7とされています。また、熟年離婚の理由として「会話がなし」「感謝がない」「家事をしない」という夫への不満3Kも挙げられています。さらに、職場だけの人は定年退職後に行くところもすることもなし『終わった人』になってしまうので、そ

うならないために「イクメン」「カジメン」「イキメン」になることを推奨しています。

子育てをする「イクメン」は期間限定の特権ですが、子どもがいくつになっても子育てはできるので、いつからでも間に合います。

家事のできる「カジメン」になると自立した生活ができますし、家のことをしている父親を見るのは子どもにとっても良いことです。

そして、地域活動をする「イキメン」になると、地域にネットワークが広がります。日本人は行政を頼り過ぎているので、教育や福祉、防犯、防災等を、ある程度地域で担うと、行政の負担が減り、行政の人や予算をもっと有効なことに使えるようになります。そこで、各自の能力を地域に還元して社会の役に立てたら、幸福感を得られます。そうなるには、自分の経験値や得意なことの延長線にあるものを地域や社会の中に見つけることです。

一方で、最近、職場における「女性活躍」という言葉が流行っていますが、それには何よりも男性の意識改革が必要です。つまり、家庭で夫はイクメンに、職場で上司は部下が仕事も私生活も両方できるように働き方改革を進めるイクボスにならなければなりません。



そのように、男性が Life や Social の活動をする と視野が広がり、生活者視点が手に入り、イノベーターになる等、仕事の能力が高まりますし、逆に、家事や育児や地域活動の経験を持つ専業主婦は、すでにその能力を持っているので、それを仕事に活かしてほしいと思います。そして、仕事の経験を家庭に、さらに趣味に、勉強に、地域活動に、親孝行に、子育てにと影響し合う「寄せ鍋人生」を送っていただきたいと思っています。

(文責：イーブルなごや指定管理者アイ・コニックグループ)